

香川大学

二〇二四年度

問題冊子

| | |
|----|------|
| 国 | 教 |
| 語 | 科 |
| 国 | 科 |
| 語 | 目 |
| 14 | ページ数 |

試験開始の合図があるまで、問題冊子を開かないこと。

解答の書き方

1. 解答は、すべて別紙解答用紙の所定欄に、はっきりと記入すること。
2. 解答を訂正する場合には、きれいに消してから記入すること。
3. 解答用紙には、解答と志望学部及び受験番号のほかは、いっさい記入しないこと。

注意事項

1. 試験開始の合図の後、解答用紙に志望学部及び受験番号を必ず記入すること。
2. 試験終了時には、解答用紙の1ページ目を表にし、机上に置くこと。解答用紙は、解答の有無にかかわらず回収する。
3. 試験終了後、問題冊子は持ち帰ること。

〔1〕 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

「シンギュラリティ」について語るカーツワイルの本を読んでいると、技術がどこまでも進化するということを、彼が全く信じ込んでいることに驚く。ある種テクノナルシズムと言いたくなるような傾向も見えてくる。彼の主張自体よりも、無限の可能性を信じるその信念のほうが驚きなのだ。科学技術のすさまじい進歩は指数関数で考えなくてはならない、と科学（工学）の成果をもとに彼は予測しているが、この信念自体はそれほど科学的なものではない。

たとえば、ナノロボットといわれるような、ナノスケールのロボットを作り出して、それを口から吸引したり、体内に投入したりする。脳の記憶は進化にしたがってだんだん容量を増やしてきたが、ナノロボットによってそれをさらに飛躍的に増大することができるという。記憶の限界などないといわんばかりの可能性を、カーツワイルは唱えている。そしてある局面では、技術の状況は現実にそういう進化をとげているだろう。大量のナノロボットを脳の中に注入して、思考の活動を精密にスキャンすることもできる。すでに外部から脳のスキャンングをすることができるようになり、脳科学は長足の進歩をとげているが、まだ分からないことが多い。脳内を至近距離から精密にスキャンすることによって、思考や記憶のほとんどの機能を人工的に作り出し、再現できるようにする。ついには個々の人間の記憶と履歴の全体がダウンロードされ、保存され、^⑦イソウされるSF的な世界が実現されるだろう。

技術の進化は、そのように到達不可能に見える遠い目標をまずたてておいて、そこに少しでも近づくための試行錯誤を繰り返すことによって実現されてきたのにちがいない。そういう極端な仮説的立場にも有効性があること自体は否定すべくもない。「身体」についても、カーツワイルの構想は、細胞がますます精巧に修復できるようになり、究極的には死がなくなるということまで折り込んでいる。「不死の人間」が、技術の最終目的の一つなのだ。脳に関しても、細胞のメカニズムが分かってくるにつれて、その作用を人工的に再現し拡張する可能性が考えられていく。しかし、^①完璧に機械化されてデータの蓄積と処理しかならない身体とは、もはや身体ではないだろう。もちろんそれが身体であるか、ないかということとは、技術の野望にとって問題ではな

い。目標はあくまでも最高のパフォーマンスを達成する不死の身体なのだ。

こういう認識の姿勢には、身体とは何か、思考とは何かということに対する、致命的な誤解が含まれているかもしれない。人間の思考は、きわめて複雑で特別な進化の果てにあるもので、人間が作り出したものではない。それは神という名前さえもたない「自然」ではないか。生命に関しても、脳に関しても、どこまで解明が進んでも、それをそっくり複写し再現しようと思うことは、まったくの錯誤ではないのか。シンギュラリティにむかって猛進していくかわりに、むしろこのように問う立場もあり続けるだろう。コンピュータのメモリーに完璧に複写される不死の人間、ついにはそのような技術を、技術自体の生み出した脳によって実現する人間とは、技術者にとって究極の夢にちがいない。しかし、それを疑う人間の「常識」がそれにたちはだかる。

常識を疑わなければ新しいものの創造はないとしても、かろうじて常識の重みが、知性の暴走をヨクセイするという局面も確かにある。哲学もまた、常識を深く疑うと同時に、常識の深みと重みに根ざす知でもある。そして「常識とは何か、決して正解があるわけではない。技術か、人間か。人間の答えがあり、技術の答えがある。常識とは、いわば有機的な知識なのだ。ある種の生命観、そして歴史、社会の有機的な構成にしたがおうとする思考である。そのような有機性に対しては、非有機性の側からの批判がたえずむけられるし、むけられねばならない。しかしカーツワイルの言うような「シンギュラリティ」だけが、非有機性の可能性ではない。^①ポウダイな電子メモリーに還元された不死の人間とは、極限まで非有機化された有機性である。しかし私たちが、人類史を導くかのような言語に、精神に、技術に見出してきた非有機性とは、あくまでも有機体とともにあり、有機体の別の様態としての非有機性である。この非有機性は、決して生命の有機性を超越するのではなく、あくまでもそれに内在する。しばしば有機性を超越するように見えるが、それもむしろ有機性に潜在していたものであるかのようなものである。

たとえば、将棋やチェスのようなゲームでは、AIが人間を負かすところまで技術は進化した（正確に言えば、人間はそれほど高度なプログラムとメモリーを作ることができるようになった）。しかし将棋がいかに複雑な計算を要するにしても、人間が思考すること自体は、それと比べてもケタ違いに複雑なのだ。^②どんなに弱い指し手であろうと、一人の人間が将棋を指すときのパフォーマンスは、AIのそれとは、ちがう次元をもっている。計算の能力と、思考の能力とは、同じ能力ではない。しかしこ

の違いはどうか、説明され、論証されるだろうか、いやはたして論証しうるかどうか。生命、人間の身体、そして脳の「働き」の複雑さは、どのように複雑で、この複雑性は何を意味しているのか。脳とAIでは「思考」の性質がまったく異なっているのか、それとも処理可能なデータの量的差異があるにすぎないのか。それなら質的差異のほうは十分解明され定義されたのか。人間は、能力の劣るコンピュータにすぎないのか。この劣等者は、自分よりも優秀なものを作り出すほど優れているというわけだろうか。

たとえば人間はほとんどいつも、毎日ある種の気分(あるいは感情)の中で、気分が悪ければ良くしようと思ひ、あるいは何か欲望があればそれを実現しようと思ひ、気がかりがあれば解消しようとして生きている。つねにそういう波立ちともにある気分とは、それ自体複雑な、まさに様々な力の組み合わせから出てくる(スピノザは、それを端的に「喜び」と「悲しみ」と呼び、精神と身体の両方を規定する状態と考えている)。気分や気遣いの波動の中で、つねに複雑な曲線をたどりながら思考が行われている。そして、やがて死に至る。いかに突然の死があろうと、とにかく死は周到に準備されている。病氣や不慮の死に遭わなくても、細胞分裂の回数には限界があつて、その回数を超すと終わりを迎える(分裂しない細胞は、もつと確実に死へと定められている)。つまり死は避けられない。毎日人間は睡眠をとるといふ不能率なこともしている。つねに情動の波立ちがあり、休み、弛緩する必要がある、そのリズムの中に思考がある。「非人間的なもの」を考察しながら、リオタールは「人間が苦しむ」といふことを、思考の還元不可能な特徴として挙げていた。しかし苦しみ、感情、情動さえも、デジタルな操作によつて全部再現し操作してみせるという、そのような技術さえも構想することができるだろう。また細胞分裂の回数という決定的限界を超える技術さえも考えられていくのだろう。

それにしても人間に、そして生命、身体に固有の(様態)とは何か。将棋のような活動さえも、勝つことに集中する情念や緊張に導かれて思考や計算は進行し、それを同時に楽しむような(自己との関係)さえもそこでは作動している。ところが設計されたプログラムにしたがうゲームには、実は勝利と敗北の違いさえなく、コマの配置というデータの差異があるだけだ。人間に情念があり、愛があり、欲望があり、苦しみがあるということは、もちろん不完全性のしるしでもある。そして究極的な「不完全」と

秦乃偃兵、輟不攻魏。

〔淮南子〕

- 〔注〕 1 魏―戦国時代の強国の一つ。 2 文侯―魏国の君主。 3 閭―村の入り口。
4 軾―馬車の横木に手をかけて身をかがめ、車上から敬意を表す。 5 僕―御者。
6 布衣―仕官していない庶民。 7 窮巷―貧しい村。 8 悠悠―憂えるさま。
9 秦―戦国時代の強国の一つ。 10 司馬庾―秦国の大夫。

問一 傍線部①・⑥の読みを、送り仮名を含めて、すべて平仮名で記せ。なお現代仮名遣いで構わない。

問二 傍線部①はどういうことか、「己」・「寡人」が具体的に誰のことかわかるように説明せよ。

問三 傍線部②を現代語訳せよ。その際、「之」の内容をはつきりさせること。なお文末の「と」は省略して構わない。

問四 傍線部③を書き下せ。

問五 傍線部④とあるが、秦が魏を攻めることを中止した理由を説明せよ。

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。(設問の都合で、送り仮名を省いたところがある。)

段干木辞^{シテ}禄^ク而^ニ処^ル家^ニ。魏文侯過^{ギテ}其^ノ閭^ヲ而^シ軾^レ之^ニ。其^ノ僕^ハ曰^ク、「君何^{ナリ}為^レ軾^ス。」文侯曰^ク、「段干木在^リ、是以^テ軾^ス。」其^ノ僕^ハ曰^ク、「段干木布衣之士^{ナリ}。君軾^ス其^ノ閭^ヲ、不^レ已^ハ甚^ク乎^ト。」文侯曰^ク、「段干木不^レ趨^ニ勢利^ニ、懷^ニ君子之道^ヲ、隱^レ処^ニ窮巷^ニ、声施^ス千里^ニ。寡人敢^テ勿^レ軾^ス乎^ト。」段干木光^リ於^ニ德^ニ、寡人光^ル於^ニ勢^ニ。段干木富^ム於^ニ義^ニ、寡人富^ム於^ニ財^ニ。勢不^レ若^ク德尊^ニ、財不^レ若^ク義高^ニ。干木雖^モ以^テ己^ヲ易^ニ寡人^ニ、不^レ為^ス。吾日悠^{トシテ}悠^ハ、慙^ニ于影^ニ。子何以輕^レ之哉^ト。」其^ノ後^ニ秦將^ニ起^レ兵^ヲ伐^レ魏^ヲ。司馬庾諫^シ曰^ク、「段干木賢^{ナリ}者^{ナリ}。其^ノ君礼^ス之^ヲ。天下莫^ク不^レ知^ル、諸侯莫^ク不^レ聞^ル。挙^レ兵伐^レ之^ヲ、無^ク乃^チ妨^グ於^ニ義^ニ乎^ト。」於^レ是^ニ

は、まさに人間が死ぬということである。死がなくなつたとすれば……。不死の人間を想定する技術は、死がなくなる世界とは何を意味するか、考えることはないし、そんな必要もないのだ。マクルーハンのように、メディア(機械)と人間が異種交配を行い、より創造的な楽しい(人間的な!)生活を営みうるといふ構想はいまも続いている。そして人間と機械が相互浸透する度合は圧倒的に深まり、それは異次元の非有機的生を実現しているとも言える。

(宇野邦一『非有機的生』による。なお、本文を変更した箇所がある。)

- 問一 傍線部⑦⑧の片仮名を漢字に直せ。
- 問二 傍線部①「完璧に機械化されてデータの蓄積と処理しかない身体」とはどのような身体のことか、簡潔に説明せよ。
- 問三 傍線部②「計算の能力と、思考の能力とは、同じ能力ではない」とあるが、なぜそう言えるのか、具体的に説明せよ。
- 問四 傍線部③「異次元の非有機的生を実現している」とはどういうことか、簡潔に説明せよ。

〔2〕

次の文章は、昭和五年に発表された井伏鱒二「晩春」の一部である。「少年工の豆給仕」と「老年工のサド」は、働いている工場
庭にある物置でひそかに内職をすることを思いつく。次はこれに続く場面である。これを読んで後の問いに答えよ。

「お前、誰にも言っではいけないぞ。」

「僕、誰にも言わないよ。」

①彼等二人は誰にも秘密で、この物置で養兔業の内職をしようとしたのである。二ひきの兔は、一ひきが雄で、一ひきが雌
で、これ等の兔を売ってくれた夜店商人の言うところによると、兔は一箇月に二十ぴきずつの仔兔を産む。それ故、老年工のサ
ドと豆給仕とは、毎月二十ぴきの兔を締め殺して食うことができようというのである。

豆給仕は老職工よりも豊かな空想力を持っていた。

「僕は兔の毛皮で外套をこさえよう。手袋も毛皮でこさえよう。冬になると自転車乗りが両方の耳に毛皮の霜よけをはめるね？
あんなのも一つこさえなくちゃ。」

老年工のサドは豆給仕よりも現実的であった。彼は豆給仕をトタン塀のところへ引張って行って、まことにしとやかにたしな
めた。

「ほんとにお前は毛皮の外套をつくるつもりか？ お前の給金は幾らだと思っんだ？ すぐに兔のことが露見してしまうぜ。少
し気をつけろ！」

「毛皮は外套の裏につけるだけだよ。つまり総裏毛皮というやつだ。」

「それなら俺も一つこさえようか。」

その翌日、彼等は他の職工達の誰よりも早く出勤して、広場のタンポポの葉を摘みとった。老職工のサドは、上衣やズボンの
ポケットからはみ出るほどのタンポポの葉を摘みとって、物置の戸を細目にあげ、その隙間からそれ等の葉を投げ入れたのであ
る。彼の指や掌にはタンポポの液汁がくっつき、その部分だけが黒い斑点となってよこれた。そして彼のズボンや上衣にはタ

問一 傍線部②「つれづれにながめ明かし暮らしつつ」、③「やるかたなきものから」、④「見しやうにもおぼえず」、⑤「えおとづれやらず」を現代語訳せよ。

問二 傍線部①「さしあたりて、恥づかし、いみじと思ひ知るかたばかりのがれたりしを」とあるが、紫式部が宮仕え以前にそのような思いから逃れられていたのはなぜか、説明せよ。

問三 傍線部②「あらぬ世に来たる心地」とあるが、紫式部は宮仕え以前と比べて何が変わったと感じているのか、説明せよ。

問四 傍線部③「世にしたがひぬる心」とは、今の環境に順応してしまった心という意味であるが、具体的に何を指しているか、説明せよ。

問五 紫式部はこの日記を書く際、一条天皇の中宮定子に仕えた女性が書いた文学作品を意識したと考えられる。その作品の名称を答えよ。

ンポポの綿毛みたいな種子が軽々と宿り、彼が体を動かす度に綿毛の種子は空に舞いあがった。少年工の豆給仕は、慾ばつてスミレの葉や薊あざみの葉までむしりとつた。二ひきの兎は一週間かかっても、そんなに多量の草の葉は食べきれないであろう。

朝の汽笛が鳴った。恰あかも工場の屋根全体が一律の鋭い音を発したのである。その音が止むと、再び、それと同じ音の汽笛が鳴った。この汽笛の音は、この工場の女工達の言うところによると「お化粧しなくてもいい！ そうだとも！」といって鳴りひびくというのであったが、この工場の社長が自筆した趣意書によると「楽しく明るく仕事に就け！ そうだとも」といつて鳴りひびくのだそうである。その趣意書は工場のそれぞれの部屋の壁に貼りつけてある。しかし汽笛は、実際には「ピイピイ」という甲高①い音で鳴りひびいたのである。

豆給仕とサドとは、汽笛が鳴り止まないうちに、すでに工場に走り込んでいた。そして汽笛がその音の終末をいきなり切断して棒ぎれみたいに太い音のまま消えたときには、老年工のサドは穴ぐらの石炭の堆積の上に腰をかけていた。豆給仕は他の多くの職工達の風俗を見真似まねて、首にきたないタオルをかけ機械から遠のいたところに立っていた。彼とサドとは、まごまごして他の職工達に叱られさえしなければよかったのである。

一週間ばかりすぎたとき、工場の職工達は罷業（注）した。男工達は材木屋の広場に幕を張り、女工達は材木屋の倉庫をかたづけ、それぞれそこを仮の合宿所としたのである。こういう場合には必ず何処どこからか応援者がかけつけるものであつて、その応援者はなかなか弁舌②がうまい。

女工達の合宿所へやって来た応援者は、黒い洋装の婦人であつたが、彼女は女工達に男みたいな話しぶりで演説をしてきかせた。――「諸君われわれは今や……」

などといったので、女工達はその弁士を尊敬し、お互に結束をかたくすることを誓つた。

男工達の合宿所へやって来た応援者は、二人の弟子をつれて来た。最初弟子が演説して、最後に先生が演説した。やはり先生も「諸君われわれは今や……」という言いかたで饒舌しゃべつたのである。

罷業団のものは誰も合宿所――その陣営から外出することを許されなかった。

少年工の豆給仕と老年工のサドとは、合宿所の材木の上に腰をかけ、次のような相談をしたのである。

「豆給仕、お前こつそり行って兎にタンポポの葉をやつて来ないか？」

「僕いやだ。見つかったら張り倒される。」

「事情をよく言つて、これこれこうだといえれば大丈夫だろうじゃないか？」

「いやだ。そんなことをすれば、あそこで兎を飼つていたというので、罷業がすんでから僕は解雇されるじゃないか。そうだろう？」

「だが兎が不憫だぞ。まったく不憫だぞ。」

「それならば、お前自分で行け。」

「そんな無理をいうものではないぞ。俺には田舎に妻子がいる。」

——ところが夕食後、男工の合宿所では、老年工のサドが失踪した。たしかに裏切つたのだと人々は言つた。材木の下や葦簾(注2)張りのかげを捜してみたが、老年工は何処にもいなかった。人々は失踪者のことを老いぼれ野郎だといつて罵倒した。そして老年工のサドの住居——下駄の齒入れ屋の二階——へは五人の罷業委員が出張した。そして五人の委員から報告が来るより先に、工場を見張つていた委員の一人が驚くべき事件を報告して来た。

その報告によると——罷業の裏切者サドこと石炭運搬人佐道佐太郎は、夜陰に乗じて工場の塀をのりこえ、広場の木片を拾い集め工場に放火しようとした。明らかに彼は買収されて、罷業団に放火の罪を負わせようとしたものに違いない。われわれは格闘の末、彼を捕え彼のとりしらべを行つた。しかし彼はポケットにタンポポの葉と花、ならびに十銭入りの財布を所有していただけである。そして何等の発火器をも所有していなかった。彼に対する処置について、われわれは本部の指令を待つ。

本部の委員は人々と会議の結果、石炭運搬人佐道佐太郎を放免すべしという指令を発した。夜ふけに老いぼれの職工がタンポポの花をつんで遊ぶなんて、サドは発狂したに相違ないと断定されたからである。そして委員達は言つた。われわれ争議団は聖なる犠牲者を出した。一人の老職工は今や資本家の弾圧にたえかねて、発狂したではないか！

ばかりを、すこしもなつかしく思ふぞものはかなきや。大納言の君の、夜々は御前にいと近う臥したまひつつ、物語したまひしけはひの恋しきも、なほ世にしたがひぬる心か。

〈注〉

- 1 年ごろ——以下、宮仕えに出る前の回想。
- 2 そのとき来にけりとばかり思ひ分きつつ——その時節がめぐつてきたのだなあと見分けるだけで。
- 3 同じ心なるは——気の合う人とは。
- 4 すこしけ遠き——少し疎遠な人とは。
- 5 ただこれをさまざまにあへしらひ——物語について様々に意見を交わし。
- 6 さも残ることなく思ひ知る身の憂さかな——以下、今の自分についての記述。
- 7 あはれなりし人の語らひしあたり——かつて物語について語り合つた仲の良い友人たち。
- 8 おもなく心浅きもの——恥知らずで浅はかな者。ここでは、作者が宮仕えに出たことを非難する言い方。
- 9 おほぞうにては文や散らすらむ——いい加減な宮仕え生活では、手紙も人目にさらしてしまうのではないか。
- 10 住み定まらずなりにたり——宮仕えに出た後、居所が一定しなくなつた。
- 11 ここ——実家。
- 12 さしあたりておのづからむつび語らふ人——現在親しくしている宮仕え仲間のこと。以下に登場する大納言の君など。

[3]

次の文章は、『紫式部日記』の一節である。一条天皇の中宮彰子に仕えた紫式部は、主家(藤原道長家)の榮華を目の当たりにしながらも、その宮仕え生活に埋没しきれないまま過ごしていた。次の場面は、実家に一時退出した紫式部が、宮仕えに出る前の実家での生活を回想しつつ、今の自分が失ったものを見つめる場面である。これを読んで、後の問いに答えよ。

見どころもなきふるさとの木立(こたち)を見るにも、ものむつかしう思ひ乱れて、年(とし)ころつれづれにながめ明かし暮らしつつ、花鳥の色をも音(ね)をも、春秋(はるあき)に行きかふ空のけしき、月の影、霜雪を見て、そのとき来にけりとはかり思ひ分きつつ、いかにやいかにとばかり、行末(ゆくすゑ)の心細さはやるかたなきものから、はかなき物語などにつけてうち語らふ人、同じ心なるは、あはれに書きかはし、すこしけ遠き、たよりどもをたづねても言ひけるを、ただこれをさまざまにあへしらひ、そぞろごとにつれづれをば慰めつつ、世にあるべき人数(ひたす)とは思はずながら、さしあたりて、恥づかし、いみじと思ひ知るかたばかりのがれたりしを、さも残ることなく思ひ知る身の憂さかな。

こころみに、物語をとりて見れど、見しやうにもおぼえず、あさましく、あはれなりし人の語らひしあたりも、我をいかに(注8)おもなく心浅きものと思ひおとすらむと、おしはかるに、それさへいと恥づかしくて、えおとづれやらず。心にくからむと思ひたる人は、おほぞうにては文や散らすらむなど、疑はるべかめれば、いかでかはわが心のうちあるさまをも深うおしはからむと、ことわりにて、いとあいなければ、中絶(なかた)ゆとなけれど、おのづからかき絶ゆるもあまた。住み定まらずなりにたりとも思ひやりつつ、おとなひ来る人もかたうなどしつつ、すべて、はかなきことにふれても、あらぬ世に来たる心地ぞ、(注11)ここにてしようちまさり、ものあはれなりける。

ただ、えさらずうち語らひ、すこしも心とめて思ふ、こまやかにものを言ひかよふ、さしあたりておのづからむつび語らふ人(注12)。第二回の報告が来た。それによると――罷業団の聖なる犠牲者に五十錢銀貨を与え、附添人(つぎそ)をつけて犠牲者の自宅へおくろうとしたが、犠牲者は附添人をつけることを固辞した。そして彼は工場の方角を幾度となくふりかえりながら立ち去つたが、その後ろ姿は不憫の極みであつた。

――罷業は二十三時間で終り、翌々日から職工達は平日通り就業した。彼等が罷業によって獲得したところのものは、昼食後の休み時間を二分間ほど多くするという規約であつた。

少年工の豆給仕は、老いぼれの犠牲者については何も知らなかつた。彼は罷業の夜は熟睡して、人々が彼を押しもたたいても目をさまさなかつたのである。

彼は罷業後第一日の朝、タンポポをポケットに入れ工場の物置のなかにしのびこんだ。そこは真の暗がりであつたが手さぐりで捜してみなくても、彼の兎は活潑(かつぱつ)に生棲(せいせい)していることがわかつた。兎達は豆給仕の両足の間をくぐりぬけ、戸にぶつつかつたりしたのである。そして豆給仕の歡喜の絶頂であつたことには、彼は暗がりのなかで一びきの仔兎を掌(てのひら)にすくいあげることができたわけである。豆給仕は彼の肋骨(ろつちゆう)のところが脈搏(みやくはく)はげしいことに気がついた。これは嬉しいことの証拠である。彼の掌のなかの仔兎は、掌を恰も住み心地のいい巣であるとかんちがいしたらしく、安息な身動きをした。物置の戸の間隙からは、僅かに朝の光線がさし込んでいて、その光線を仔兎にあびせてみると、闇のなかにうかぶ一びきの純白な兎の像が出来あがつたのである。

(筑摩書房刊『井伏鱒二全集 第二巻』による。なお、本文を変更した箇所がある。)

〈注〉

- 1 罷業―ストライキ。労働者が団結・同盟して、労働の提供を拒絶し、資本家に圧力をかける行為。
- 2 葦簾張り―葦(すたね)でつくった簾をいくつか並べておくこと。

- 問一 傍線部㉗㉘の漢字の読みを平仮名で書け。
- 問二 傍線部㉑とあるが、「彼等二人」の存在と対照的に設定されているものは何か。それについて詳しく説明せよ。
- 問三 傍線部㉒とあるが、老年工のこの姿は、これより前のある表現を受けている。そのことによる効果を具体的に説明せよ。
- 問四 傍線部㉓とあるが、この結末は物語においてどのような意味を持っているのか、詳しく説明せよ。